平成22年11月1日発行　第41巻 第11号　毎月1回1日発行　昭和46年1月27日第3種郵便物認可
ISSN 0385-2229

月刊 地域保健

11
2010

●特集
保健師教育を包括的に考える
シームレスに学び、育てる仕組みづくり

●FACE 2010
静岡県健康福祉部医療健康局健康増進課
主幹兼健康増進班副班長
土屋厚子さん

●OPINION！ 保健師さんへ
「高齢化社会をよくする虹の仲間」運営委員長
社会福祉法人緑成会「緑の郷」特別参与
野原すみれさん

Face 2010

「動かそうとしても人は動きません。こちらから具体的なデータや方法を示すのです」

仲間思いの県庁保健師の素顔と足跡

静岡県健康福祉部
医療健康局健康増進課
主幹兼健康増進班副班長
土屋厚子さん

取材・文　編集部
photographs：Sei Kamiyasu

初めて土屋厚子さんにお目にかかったのは、今年の保健師中央会議（厚生労働省）の休憩時間だった。当コーナーの取材依頼のため既に電話でお話はしていたが、静岡から出てくる機会をつかまえて事前に挨拶をしておこうと思ったのである。せわしない休憩時間のお邪魔にならないように、挨拶は簡単に済ませるつもりだった。ところが土屋さんは時間を気にする様子も見せずに、静岡県の取り組みについて資料を手に話し始めた。世話好きで親切な人だと思った。その名のとおり情に厚くかかわる相手には正面から向き合ってくれる人――そんな印象を持った。

◎

実は以前から「静岡県庁に市町村から慕われている保健師がいる」という評判を何度も耳にしていた。人望が厚い土屋さんとはどんな人なのか、会ってみたい――それが土屋さんに当コーナーにご登場いただくことになった経緯である。

子どものころから家庭訪問!?

土屋さんは静岡県西部、天竜市（現・浜松市）の出身。子どものころは健康優良児だった。その表彰式で保健所長の隣に座っている写真が残っている。親せきも保健師だったというから当時からこの世界には少なからず縁があったようだ。おっとりとした性格だが、学校では小学校高学年からリーダー的な存在で、いつも周りには助けてくれる友達がいたという。

「昔は欠席した子の給食のパンが残ったら『家に持って帰れ』と言われましたよね。クラスには不登校の子が何人かいたので、下校途中にその子たちの家に寄ってパンを届けていました。訪ねて行くとそこにアルコール依存の怖いお父さんがいたり……なぜかそのころから家庭訪問をしていたのです（笑）。同窓会で久しぶりに会ったとき、『あっちゃんが家に来てくれたから、学校が楽しいものに思えてきたんだよ』と当時の心境を打ち明けられました。そんな経験があるものですから、保健師になって精神の家庭訪問をするときにもおじけづくことはなかったですね」

特集

保健師教育を包括的に考える

シームレスに学び、育てる仕組みづくり

保健師の育成については大学等の基礎教育から新任・現任教育に至るまで、さまざまな問題が指摘されている。基礎教育では統合カリキュラムによる保健師教育時間数の不足、保健師としての素養・自覚を身につけないままのライセンス取得などが問題となっており、現任教育では新任期の２割、中堅期の３人に１人の保健師が研修を受ける機会がない実態が明らかになった（日本看護協会調査）。保健師としての基礎力がないままに現場に出て困惑を深め、活動の本質を理解できず日々の業務に流されている保健師が少なくないことが懸念される。たとえ就業後に大学院等で専門性を学ぶ機会はあるにしても、職場復帰の保障があるとは限らない。基礎から新任、リーダーへと続くシームレスな保健師育成システムの実現は大きな課題である。

特集では基礎からリーダー養成に至るまで、それぞれの段階における教育の現状と課題をまとめるとともに、包括的な視点からの教育システムを考える。

P16 なぜ保健師の人材育成を包括的に考えるのか
◎佐伯和子（北海道大学大学院）

P22 大学教育の現状と今後の行方
◎岸 恵美子ほか（帝京大学医療技術学部）

P28 なぜ大学院化が求められるのか
◎村嶋幸代（東京大学大学院）

P34 現任教育の現状と課題
◎藤井 誠（厚生労働省健康局総務課保健指導室）

P42 青森県における新任教育
◎梅庭牧子（青森県健康福祉部健康福祉政策課）

P50 埼玉県における中堅・リーダー養成
◎本橋千恵美（埼玉県保健医療部保健医療政策課）

P58 保健師教育の費用対効果について
◎堀井とよみ（社団法人 日本看護協会）

ひよこ保健師 season 4 第8回

目指すは人と人をつなぐ保健師です！

看護師から保健師へ、でも事務量の多さにはびっくり

大曽根政子（おおそねまさこ）さん
●牛久市保健福祉部健康管理課

◀市役所の隣にあるシャトーカミヤにて

取材・文・写真／西内義雄
（医療・保健ジャーナリスト）

「とにかくガッツがあり、失敗を恐れず何でも自分でやるという姿勢に先輩たちもいい刺激を受けています」との推薦を受け、今回訪ねたのは人口約8万人の茨城県牛久市。アクセスは都心からJRで1時間以内。〝つくば〟や〝水戸〟ほどのネームバリューはないものの、牛久シャトーカミヤ（ワイン）と巨大な大仏様があり、首都圏では日帰り観光のよいスポットになっている地域である。

ここで保健師2年目を迎えたのが大曽根政子さんだ。看護師として4年間の社会経験を積んでいるため、年齢は29歳。出身は同じ茨城県内の小美玉（おみたま）市（旧小川町）。といってもピンとくる方は少ないはずなので、茨城空港のお膝元とご紹介するほうがいいだろう。もちろん当時は空港という名称ではなく自衛隊百里（ひゃくり）基地だったわけで、同級生の半数近くが自衛隊関係者。転出入も頻繁だったようだ。

父が倒れたときの音がとても怖かった

自身の将来を医療職と考えるようになったのは中学3年生のころだった。

「狭心症を患っていた父が、私が中3のときに心筋梗塞で入院しました。大学生のときにはバイパス手術もしています。今は元気ですけど、一番怖かったのは自宅で倒れたときでした。『バタン！』とすごい音なんですよね」

家族の病気を目の当たりにし、看護師を目指す気持ちが芽生え始めた。高校ではほかにも浮かぶ職業はあったが、2年生の後半「やっぱり看護師を目指そう」と決意したのだった。

「あのころは茨城県をはじめ、近県に看護大学がいくつか開校したこともあって、クラスの中でも看護師を目指そうという人が多かったのです」

▲子どものころのスナップより。とても活発そうだ

目標を定めた大曽根さんは千葉県立衛生短大（現・県立保健医療大学）に進学した。保健師という仕事を意識するようになったのは3年生のとき。地域看護の実習で家庭訪問（精神）や三歳児健診を経験し、看護師とは違う仕事があることを理解した。それは「利用者さんが来てほしいといって行くのが（訪問）看護なのに対して、こちらから行くことができるのが保健師」と